

第三世界のフランス語文学

——オセアニア・インド洋の場合——

伊 川 徹

本論を進めるに当たり、今更ながらフランス文学 *la littérature française* とフランス語文学 *la littérature francophone* の定義をしなければならない。

前者はフランス語で書かれ、フランスで発表され、そして流布された文学作品の総体であり、作者が外国人か否かを規定するものではない。したがって、母国による政治的迫害を避けてフランスに亡命し、フランス語で作品の発表を始めた人々の文学もフランス文学なのである。

後者の *francophone* は地理学者 Onésime RECLUS が1880年に初めて用いた *la francophonie* (フランス語を用いている人々の総体) に由来するが、それらはスイス・ベルギー・ルクセンブルグ (*l'Europe francophone*)、ケベック・ヌーヴォー＝ブランズウィック (*le Canada*)、ギアナ・ハイチ・カリブ・モーリシャス・セイシェル (*les pays cléolophones*)、マダガスカル (*l'Afrique*)、レバノン・エジプト・ヴェトナム・カンボジア・ポリネシア・ヌーヴェル＝カレドニー (*D'autres francophonies*)、イギリス・ルーマニア (*la francophonie choisie*) の諸国・諸地域を指し、そこに住む人々がフランス語表現によって書いた文学をフランス語文学と呼ぶのである。

ところで、フランス第5共和国憲法第1条は「共和国、及び自由な決定の行為によってこの憲法を採択する海外領土の人民は、一つの共同体を設立する。共同体は、それを構成する人民の平等及び連帯に立脚する」ことを規定し、同法第72条は共和国の地方自治体は「市町村 *les communes*、県 *les départements*、海外領土 *les territoires d'Outre-Mer*」から成るとし、これによって、フランス共和国 *la République française* がフランス本土 *la France métropolitaine* だけではないことが分かる。更に同法第76条は「海外領土が第91条第1項に定める期間内に成されるその地方議院の議決によって、その意志を表明する場合は、それらは、或いは共和国の海外県に、或いは相互に結合し、又は結合せず、共同体の構成国になる」旨規定しており、所謂フランスはフランス本土 (95県) と4つの海外県 (*les départements d'Outre-Mer: la Guadeloupe・la Martinique・la Guyane française・la Réunion*) 及び海外領土 (*le Saint-Pierre-et-Miquelon・la Polynésie française・la Nouvelle-Calédonie・les Îles Wallis*

et Futuna・la Territoire des Afars et des Issas 場合によって、南極の la Terre-Adélie 及び英仏共同統治領 les Nouvelles-Hébrides を加えることもある) から成る共同体 une Communauté のことなのである。このため、定義上はフランス語文学であるはずの海外県や海外領土の地域住民、例えばギアナやヌーヴェル＝カレドニーの人々のフランス語表現による諸作品は、両地域で発表され、流布したとしても、法律上たちまちフランス文学ということになってしまう。つまり、旧宗主国の植民地支配からの脱却に失敗した地域では1国家・1国民・1文化・1言語¹⁾=文化 la culture という旧来の価値基準が否応なく成立してしまうことになるのである。

さて、1970年代からカリブ海域でクレオール文学 la littérature créole が台頭してくるが、スペイン語の criollo (育てられた人の意味から16世紀に於ける新大陸生まれの純粋スペイン人を指すようになった) を語源とするこの言葉 créole は本来言語学上の概念であった。被支配者である植民地原住民や奴隷などの外来の移住者が支配者である植民者の言語を簡略化して使用する必要性から、中国の pidgin English (business English の現地訛り) や南西太平洋の beach-la-mar (語彙の不足を限られた語の結合で補う伝達法) が生じ、それを母語とする二世や三世の登場によって le créole (クレオール語) が成立したとする考え方である。しかし1980年代に入ると、créole が文化人類学の概念として転用され始め、特定の地域に於ける住民の identité の流動性の指標となる。80年代を通じてポスト・コロニアル研究と呼ばれる理論的営為の中で取り扱われてきた多様な論点から、カリブ海世界の歴史とそこから生まれたクレオール文学のルーツを俯瞰するとき、ポルトガル・スペイン・フランス・イギリスの植民者の襲来によって絶滅させられた先住民とその言語(岩上に彫り残され、カリブの受難を物語る作者不詳の絵文字)に代わって、珊瑚礁と緑のみを残した島々に労働力だけを期待され、アフリカからはるばると連行された黒人たちによって新たに創造された混成言語が誕生し、更にインド・中国・シリア・レバノンからそれぞれ固有の伝統を持った移住者がその都度新たなルーツを加えるという、そこにはまさに移植のみによって形成された奇妙な言語世界の系譜が明らかになる。

ところで、現在フランス内外で最もよく読まれているフランス語表現の文学の作家とえば、チェコの Milan KUNDERA であろうし、フランスで最も権威ある文学賞であるゴンクール賞 le prix Goncourt の最近の受賞者を挙げるならば、モロッコの Tahar BEN JELLOUN (1987年度)、マルチニックの Patrick CHAMOISEAU (1992年度)、レバノンの Amin MAALOUF (1993年度)、ロシアの Andrei MAKINE (1995年度)、カナダの Antonine MAILLET (1997年度) と例年の如くフランス本国以外の作家がその対象となり、フランス

語文学がフランス文学を凌駕している現状である。曾ての宗主国の言語である le français (フランス語) が植民地支配の所産として多民族に共有され、近代の植民地解放に伴って、被支配者が支配者の言語を以て自己表現せざるを得ない状況が生まれ、更にそれが文学の領域に広がった結果である。前掲の CHAMOISEAU との共著 *Lettres créoles* (1991年刊) の中で、アンテル・ギアナ・ハイチに於ける文学の状況について注目すべき分析を試みたマルチニックの作家 Raphaël CONFIAINT によれば、

……まずフランコフォン作家を大きく2つのタイプに分類する。アイルランドのベケットやロシアのマキースのように自分の意思でフランス語表現を選びとった「自由なフランコフォニー (francophonie libre)」と、歴史のある局面で暴力によって植民地の人間に押しつけられた「強制されたフランコフォニー (francophonie contrainte)」である。この「強制されたフランコフォニー」はさらに2つに分かれる。マグレブやレバノンのように何世紀も前から書き言葉をもっている場合と、アフリカやクレオールのように話し言葉しかもっていない場合である。後者はさらにまた2つに分かれる。アフリカのフランコフォニーは植民地化される以前から父祖伝来の話し言葉と独自のレトリックをもっていたのに対し、カリブ海ではヨーロッパ人の到来によって原住民とその原語がほぼ根絶やしされ、失われた記憶の上にクレオールと呼ばれる混成言語を新たにつくらねばならなかった。生きのびたアメリカインディアンの言葉と、アフリカ各地から輸送された黒人奴隷の言葉と、17世紀の標準化される以前のフランス各地の方言から、レヴィストロースのいうブリコラージュと混淆²⁾によって、クレオールの言語と文化は再創造された。

のである。フランス語文学の現状を概観すれば以上のような系譜を辿った訳であるが、本論のオセアニア・インド洋の場合もこれに等しく重なり合うのであろうか。

*

カリブ海域諸島の悲劇は1492年10月12日の Christophe COLOMB による San Salvador (近年の調査では Samana Cay) 島上陸に始まる。ポルトガル・スペイン・イギリスの植民者は初めて遭遇した「異形の侵入者」に抵抗した原住民の掃討によって島々を占領したが、これら諸国に若干後れをとるかたちで植民地獲得競争に参入したフランスはこれを踏襲しなかった。

18世紀から19世紀にかけてのフランスの対外政策はキリスト教(カトリック)の布教と密接な関わりを持つものであった。フランス政府外交官或いは海軍軍人が植民地化を目論む地域に

自国の宣教師を現地情報提供者として派遣し、その宣教師に偶然加えられた、或いは故意に加えさせた弾圧を口実に、今度は海軍陸戦隊を主軸とする軍隊を派遣、相手に布教を認めさせた上、そのまま駐留するという実に巧妙且つ狡猾な方法で植民地形成の端緒としたのである。1789年のフランス革命によって、フランス政府は国内的には教会が既得権として持っていた凡ゆる束縛から解放された社会を創造することに努める一方、海外では軍事力を背景にカトリックの宣教師を優遇し、その布教活動を積極的に支援するという極めて矛盾に満ちた政策を展開した。³⁾

したがって、オセアニア・インド洋のフランス植民地では僅かの例外を除いて、先住民が外交団や軍隊に組織的抵抗を試みることもなく、仮に抵抗があっても、先住民を掃討してしまうようなポルトガル・スペイン・イギリス方式は採られなかったのである。当然のことながら、植民地の先住民とフランス人それにアフリカ大陸の黒人、中東アラブ人、インド人、東南アジア人、更には外洋航海船の恩恵によって、それまでは往来のなかった周辺諸島民を加えて、それは賑やかな混血が始まる。そこではカリブの植民地の如く「失われた記憶」の上に構築されるのではなく、先住民族の色彩を継承しつつ混成言語・混成文化が進展する。

*

ヌーヴェル＝カレドニー島は1774年、James COOK によって発見され、1853年公式にフランス領となった。1860年から植民が始まったが、1864年から1896年まで流刑地となったために思うように発展せず、おまけに1860年から1879年まで約20年に及ぶカナカ族の反乱鎮圧にも失敗、しかし幸いなことに1870年、極めて良質なニッケル鉱脈が発見され、この島の経済的重要性は高まった。1884年民政府から軍政府に転換、1946年にフランス海外領土となった。その後数年間に亘って独立の機運が高まり、遂に1984年民族自決への道筋を開く新しい法規が制定された。1985年、何件かの殺人事件が発生、ゲリラと独立反対派の対立を生んだが、9月に地方選挙が実施され、7月に制定されていた新しい法規にしたがって、4つの地域の中3つまでを独立賛成派が制した。その後、島の独立か海外領土の現状維持かを決定する住民投票が1987年に実施され、独立反対派が勝利、現在もその火種は燻り続けている。⁴⁾

伝統的なヌーヴェル＝カレドニーの文学はメラネシアの口承文学（数点については仏訳がある）のみで、他には現地で les Caldoches と呼ばれるフランス人を初めとする白人や旅行者たちが流刑地として選ばれたこの島について、それを歴史的に考証する作品を残しているに過ぎない。Jean MARIOTTI や Jacqueline SÉNÈS などの作家が知られているが、中でも

Georges BAUDOIX (Paris, 1870~Nouvelle-Calédonie, 1949) は4歳からこの島に住み、地下資源調査員の傍ら、当地の歴史や文化に興味を抱き、カナカ族(メラネシア人)の伝説とコントについて地方誌に発表するなどして活躍した。1928年、*Légendes canaques*の最初のシリーズを発表、巻頭言を哲学者で社会学者の Lucien LÉVY-BRUHL が執筆している。生前はあまり評価されなかったこの作品は、彼の死後ネオ・カレドニア文学 la littérature néo-calédonienne の金字塔として認められた。他に *Légendes canaques I, Les vieux savaient tout II, Ils avaient vu des hommes blancs* (1952), *Les Blancs sont venus, 2 vol.* (1972 et 1979), *Il fut un temps... Souvenirs du baigne* (1974) がある。

*

ポリネシアは航海者 Louis-Antoine de BOUGAINVILLE や18世紀の旅行者たちがタヒチとこれらの南の島々こそ楽園だと喧伝し、Denis DIDEROT などが《mythe du bon sauvage》(優れた未開の神秘)と名づけたため、未だにこれらの好意的イメージを損ってはいないが、Victor SEGALEN によれば、フランス人によって布教されたキリスト教が島々に定着し、口承伝説に基づいた感嘆すべき文学は風前の灯となっており、一方 Jean REVERZY はタヒチへの旅で *exotisme* と死についての著作の「ひらめき」を得たとしている。複数の地方誌の刊行が成されているものの、島民の文学としては未だ緒についたばかりの状況である。

*

インド洋の西、赤道の南に位置し、アフリカ大陸の沖合に横たわる巨大な島マダガスカルと3つの群島コモロ・セイシェル・マスカレーニュ(モーリシャス島とレユニオン島)に人間が住み始めたのは意外なほど歴史が浅く、この中には17~18世紀になってもまだ無人島であったものもある。1500年のポルトガル人の入植に始まり、やがて相次ぐ移民・植民の波が押し寄せ、既に12世紀に侵入を果たしていたアラブ人とポルトガル人それにアフリカ大陸の黒人とインドネシア人の混血が成された。マダガスカルでは19世紀の半ば、女王 Ranavalona Ière~IIIの治世にイギリスとフランスが激しく植民地化の主導権争いを演じ、この国には英仏両方の教会(英国国教とカトリック)が乱立、人々は両国の文化的影響を甘受した。最終的にフランスがこの争奪戦に勝利し、1787年以来のイメリナ王国 le royaume imérina は滅亡、Ranavalona III は1897年に退位、同年アルジェリアに逃がれた。第2次世界大戦中に日本軍の進攻を阻止

すべく再度イギリス軍が南アフリカ軍と共に進駐したが、1946年にフランスの海外領土となった。翌年から反乱が始まり、遂に1956年に自治権を確立、1958年にマダガスカル共和国 *la République malgache* となったが、幾度かの政変を経て、1975年にマダガスカル民主共和国 *la République démocratique de Madagascar* となり、現在に至っている。⁵⁾

さて、インド洋の島々の文学はそれぞれの島に古くからある言語 *le malgache* (マダガスカル語)、*le créole* (クレオール語)、*le comorien* (コモロ語) の伝統的口承文学のかたちで発展し、植民地化の始まった近世ではフランス語や英語と共に19世紀以来のマダガスカル語、それ以降のクレオール語で書かれたものも同時に通用していた。

植民地時代のマダガスカルでは、同島に入植したフランス人の間で人気のあった *18° Latitude Sud* (南緯18度) のような雑誌を通して、フランス語表現の文学活動が盛んであった。1920年以降はこれらの雑誌は Jean-Joseph RABEARIVÉLO (Tananarive, Madagascar, 1903~*ibid.*, 1937) のように若く、才能のあるマダガスカル人作家にも支持され、フランス語とマダガスカル語の *bilingue* による国民文学の称揚を惜しまぬことになった。第2の言語フランス語を用いて、後期象徴主義に向かおうと試行錯誤を繰り返した後、彼は詩型の縮列転換について、示唆に富んだ母語の借用による作詩法を思いついた。それは *le hain teny* と呼ばれる作詩法で、2人の詠み手が難解な諺や意味不明の質問用紙をお互いに交換し合って、歌を詠み競うというマダガスカル伝統の詩的才気比べとでも言うべき謎々遊びであり、多重な象徴のイメージであった。しかし、物質的生活苦と強い道徳観念的苦悩が共に解決できず、彼は1937年に自殺を遂げてしまう。*Presque songes* (1934)、*Traduit du la nuit* (1935)、*Vieilles Chansons des pays d'Imerina* (1939) などの作品がある。

それから10年後、植民地の不合理な訴訟のために流刑になった Jacques RABEMANANJARA (Mangabe, Madagascar, 1913~) が牢獄から祖国解放を戦う愛国心に満ちた抗議声明を出した。彼は1946年の選挙でマダガスカル海外領土の下院議員に当選したが、翌年3月の反乱に加担した罪で懲役刑を宣告されたのである。彼の独房からは反逆の長詩 *Antsa* (1947) が友人の許に届けられ、牢獄の詩 *Lamba* (1956) と *Antidote* (1961) では黒人性への志向が窺えるようになった。しかし、一方では彼は未開人の源流と純血への郷愁を詠んだ *Lyre à sept cordes* (セネガルの Léopold Sédar SENGOR が刊行した *Anthologie de la nouvelle poésie nègre et malgache de langue française* [1948] 所収) の中で生まれ故郷の島の讚美を忘れていない。1957年には、最初にこの巨大な島に到達したマダガスカル人たちの夢が繰り広げられる戯曲 *Les Boutriers de L'aurore* を著わした。その後、マダガスカル共和国の初代大統領 Philibert TSIRANANA 政権下で大臣も務めたが、優れた文学者は優れた政治家でも

あるという国家草創期の事例であろうか。

独立後はフランス語表現のマダガスカル文学は行なわれなくなるが、希望と幻滅の交錯する1972年5月の政変を体験した Michèle RAKOTOSON (Madagascar, 1948～) は辛辣な報道記事や短篇小説を発表して、その復活を試みた、彼女の単刀直入で強迫的な筆致は女性特有の感受性や欲望の発露と見ることもできるが、実際はマダガスカル社会に重く申し掛かるタブーと国家の崩壊を目の当たりにした怒りと混乱を全世界に伝える手段であった。*Dadabe* (1984), *le Bain des reliques* (1988) などの作品がある。

マダガスカルでは他に RABEARIVELO の遺志を継承して繊細な翻訳詩を書いた Flavien RANAIVO を忘れてはなるまい。

*

マダガスカルの東に位置するインド洋の小島が1598年にオランダ人に接収され、総督 *Maurice de NASSAU* の名前がこの島に与えられた。モーリス島 (la Maurice) では1638年から植民が始まり、やがて流刑地として使用されるようになる。1715年、フランスの所有となったが、1810年にイギリスに奪取され、モーリシャス島 (the Mauritius) と改名される。その後1814年のパリ条約によって、イギリスが引き続き守備隊を駐屯させることが決まったが、島名は再度モーリスに改められた。1833年には奴隷解放が行なわれ、インド人の植民が始まる。1948年に自治権を確立、1968年にはイギリス連邦の一員として独立⁷⁾を果たした。

モーリス島の文学活動は1810年からのイギリス支配下で始まるが、フランス系モーリス植民者の文化的 *identité* の宣言が採択され、様々な保護策も同時に実施された。当時のモーリス島の新聞社は多くの詩人や語り部の投稿を歓迎したが、中でも高踏派の影響を受けた Léoville L'HOMME の詩歌は世紀末に於ける有色人種の文学の^{フレニョーフ}前奏曲となった。高品位のモーリス出版界の存在が两大戦間にモーリスの生活を描く小説家 Clément CHAROUX, Arthur MARTIAL, Savinien MÉRÉDAC らに混って、誠実な大衆作家 Robert-Edward HART (Port-Louis, ile Maurice, 1891～Souillac, *ibid.*, 1954) を誕生させたが、彼は今世紀前半、モーリスに於いて最も注目すべき作家として夙に名を馳せた。生まれ故郷の島の文化的多元性に魅了され、そこからの詩作の豊かさに期待しつつ、高踏派や象徴派の着想を得て、心の内なる不安の音楽的表現を進めたのである。数多くの詩集や小説作品群に彼の一途な探求心が奇妙な自然主義的汎神論を繰り広げ、同時に空想的な子供時代への回帰、この島の神秘性の称揚を展開させる。*Mer indienne* (1925), *Mémorial de Pierre Flandre* (1928) などの作品がある。

Malcolm de CHAZAL (Vacoas, île Maurice, 1902~Curepipe, *ibid.*, 1981) は技術教育者で、思想や格言の作家でもあったが、1947年に Jean PAULHAN や André BRETON に認められ、彼らによって *surréalisme* の作家に数えられるようになった。*Sens plastique* (1948), *la Vie fiftée* (1949) などの作品があるが、Raymond CHASLE, Jean-Claude d'AVOINE らモーリスの数多くの詩人に大きな影響を与えた。また *Petrusmok* (1951) の中で、彼は奇妙な神話を創造している。つまり、モーリス島に『キツネザルの文明』という遺跡を発見し、生まれ故郷の島を『この世の凡ゆる不思議が入っている宝石箱』にしたのである。

Loys MASSON (Rose Hill, île Maurice, 1915~Paris, 1969) は1939年からフランス本土に亡命していたが、ドイツのフランス占領に対する主要な『レジスタンスの詩人』の一人であった。彼の小説の大多数は海事関係の歴史や象徴的なもの、或いは幻覚的なものであり、それらの舞台装置を南の海のそこかしこに位置づけ、作家と生まれ故郷の島の間で人間の絆は決して完全に断ち切られるものではないと宣言する。*l'Étoile et la Clef* (1945), *les Mutins* (1951) *les Tortues* (1956), *le Notaire des Noirs* (1961), *les Nocés de la vanilles* (1962) などの作品がある。

Marie-Thérèse HUMBERT (Plaines-Wilhelms, île Maurice, 1940~) はフランス本土に住み、教員をしていたが、*À l'autre bout de moi* (1979) で作家生活に入った。これは1950年代にモーリス島社会で嫌悪されていた双生児出生を描いた小説である。一枚の繊細な絵をゆっくりと描き上げるような展開にモーリス島社会が多かれ少なかれ隠蔽している階級闘争や人種衝突それに妄想などが浸出してくるのである。架空の島に次なるカードを切り、舞台装置を準備しながら、彼女は島嶼性の想像力を膨らませる。他に *le Volkaméria* (1980), *Une robe d'écume et de vent* (1984) などの作品がある。

Jean-Marie Gustave LE CLÉZIO (Nice, 1940~Paris, 1998) は処女作 *Le Procès-verbal* 以来彼独特の語調を人々に与え続けているが、もっと具体的な感覚、もっと重要な事実に注目すれば、彼は *la Guerre* (1970) や *les Géant* (1973) の中で都会すなわち近代工業化社会の危険な誘惑について語っている。しかし、メキシコへの度重なる旅行と長期に亘る滞在が彼を宇宙に於ける人間の条件についての冥想へ、そして根源的、存在論的探究へと向かわせるのである。1978年、彼は古代マヤ文明についてのテキスト *Mondo et autres histoires* を少年・少女向けに翻案し、その翌々年 *Désert* (1980) の出版で大好評を博したが、*le Chercheur d'or* (1985) で彼が問いかけたのは自分自身の originalité であり、identité であった。彼はモーリス出身の一家に生まれ、『モーリスの作家』を名乗り、『モーリス籍』を主張し続けたのである。

Edouard J. MAUNIK (Flacq, île Maurice, 1931～) は前掲のマダガスカル作家 RA-BEMANANJARA 同様、若い頃に流罪になった体験を持ち、ラジオ放送関係者、新聞記者、国際組織の役人などを経て詩人になった。彼の作詩法は問題提起された語や事物から同心円状に歌が詠み進められるもので、例えば基本となる語 *la mer* が与えられると、それは *l'île* > *la mère* > *le père* > *la parole* という具合に広がり、今度はそれらが応酬し合い、更に詩から詩へと言い換えられるのだが、まさしくこれはマダガスカルに於ける *le hain teny* の様式である。1989年の詩作 *L'Anthologie personnelle* では、ゆったりとしたこの作品の「広がり」と「強さ」を計測し、クレオールのリズムで拍子を取りながら、シンコペーションと省略、出会いと交配、混合と交換を称揚する彼独自の作詩法を確立した。他に *les Manèges de la mer* (1964), *Mascaret ou le livre de la mer et de la mort* (1966), *Ensoleillé vif* (1976), *En mémoire du mémorable* (1979), *Paroles pour solder la mer* (1988), *Toi laminaire* (1990) などの作品がある。

Hassam WACHILL (île Maurice, 1939～) は常に時間をかけた野心的な詩作を行ない、*Éloge de l'ombre* (1980), *Jour après jour* (1987) の2作品では日本の詩歌の静謐・密度・厳しい客観性をフランス詩に移し得た希有の存在として特筆すべきである。

*

モーリス島と共にマスカレーニュ諸島 (les îles Mascareignes) を形成するもう一つの島レユニオン (la Réunion) は16世紀に発見され、1642年からフランスのオリエント会社 (la Compagnie française de l'Orient) が利用し始める。1649年にブルボン島 (l'île Bourbon) と命名され、1664年からは東インド会社 (la Compagnie des Indes orientales) の遠洋航海船の寄港地となった。18世紀にはコーヒーやスパイスの栽培が本格的に行なわれ、1764年、フランスは東インド会社からこの島を買い戻す。1793年に現在の島名になったが、1807年のサイクロンで大打撃を受けたコーヒーの栽培は廃止される。その後1810年から1815年までイギリスに占領される。1820年からサトウキビのプランテーションが始まり、次いで1848年、奴隷制度が廃止された。1946年にフランスの海外県となり、1983年には最初の地方議院議員選挙が実施された。⁸⁾

さて、『ブルボン島の詩人たち』は幸福な(島民の凡てがフランスの海外県を享受する訳もなく、この島で詩作でもしようかと考えたり、そうすることを許された一部の裕福な家庭の子弟は) 子供時代を島で送り、高等教育機関に学んだり、立身出世すべくフランス本土へ渡っ

た。やがて郷愁を感じて、『失われし島』へ エクリチュールによって戻る……これを実行したのは Lecote de LISLE と Léon DIERX である。

モーリス島と同様に、地方新聞や雑誌が作家たちに発表の場を与え、Marius-Ary LE-BLOND は1909年度のゴンクール賞 le prix Goncourt を小説 *En France* で受賞した。レユニオン島出身の若いクレオールたちのパリでの学生生活を描いたものであったが、彼の受賞が後継のコロニアル作家たちを奮い立たせたのは言うまでもない。

長い間眠っていたレユニオン文学 la littérature réunionnaise を Jean ALBANY が呼び覚まし、クレオール語で書かれた究極の詩歌を世に問い、彼の研鑽は Alain LORAINÉ, Gilbert AUBRY, Boris GAMALEYA に受け継がれた。

後継者の一人、Jean-Henry AZÉMA (Saint-Denis, la Réunion, 1913～) はレユニオン人で、古くから高名な一族の出身であったが、第二次大戦中の対独協力について、積極的に連座した廉で、1945年にアルゼンチンへの亡命を余儀なくされた。彼はラテン・アメリカに於いて、曾ての植民地の人々と共に国際的な権利要求と団結を訴えると共に、1978年以降はレユニオン島に戻って、数多くの権利奪回を果たした。

彼の詩歌はクレオールの identité を確立するという信念や意志をはっきりと示すものであり、処女詩集 *Olgraphe* (1978) は彼の遺言とも言える象徴主義の作品である。他に *D'azur à perpétuité* (1979), *le Pétralier couleur autaque* (1982), *le Dodo vavanqueur* (1986) などの作品がある。

一方小説の分野では Anne CHEYNET, Jean-François SAM-LONG がレユニオンの文化的・社会的・歴史的特異性を表現しているが、中でも Axel GAUVIN (Saint-Denis, la Réunion, 1944～) はレユニオン・クレオール le créole réunionnais の言語文化を擁護すべく *Du créole opprimé au créole libéré* (1977) を著わした。小説の分野での彼の処女作は *Quartier Trois Lettres* (1980) だが、混成化したフランス語 (un français créolisé) で書かれ、折衷的だと批判され、若干の論争を招いた。彼はこれに対応して、1984年、*Kartyé trwa lèt* と題するクレオール語版を出している。彼がフランス語で書いた作品には *Faims d'enfance* (1987) や *l'Aimé* (1990) があるが、後者はクレオールのスパイスが効いた傑作である。

この他のインド洋の群島に於ける文学としてはセイシェル諸島 (les îles Seychelles) の Antoine ABEL のコントと物語、コモロ・イスラミック連邦共和国 (la République fédérale et islamique des Comores) の Mohamad TOIHIRI の小説を挙げることができる。

*

作家を中心に極めて概括的に第三世界のフランス語文学—オセアニア・インド洋の場合を俯瞰してきた訳であるが、ここでは混成言語・混成文化をむしろ屈託なく謳歌する姿勢或いはフランス文化に迎合しようとする態度が前面に出ているように感じられる。これはあまりにも穿った見方であろうか。同じクレオール文学の世界ながら、アフリカ大陸、中・南米、カリブ海域の旧植民地諸国のそれは悲劇と抵抗の歴史がもっと前面に押し出され、共産主義或いは社会主義による植民地解放闘争のプロパガンダの中心的存在として位置づけられ、虐殺と強制連行の怨念が混成言語・混成文化の裏面に潜伏し、表面の輝きを失わせ、艶のない、何かしらザラザラとした肌触りのものになってしまったようだ。

オセアニア・インド洋の植民地にも虐殺や強制連行は勿論、その独立を求めて武装蜂起した人々に銃弾や砲弾の雨が降り注いだのは事実である。マダガスカルでは1947年3月、自治権を主張した東部地域の反乱で、8万から10万人の死者が出ており、その後10年に及ぶ弾圧があったことを忘れてはならない。しかし、少なくともフランスによる植民地政策に於いて、オセアニア・インド洋の島々では、先住民の掃討による根絶やしが行なわれなかったのも事実なのである。虐げられたが、生き残った原住民の息づかい (*spiritus*) が今も聞こえるのである。先住民や連行された黒人たちが神との同化を獲得し、その代償として宗主国に故国と故郷を奪われたことを許してしまったからであろうか。

註

- 1) 星埜守之；シンポジウム《現代フランス文学の翻訳と多文化状況》(1998年度日本フランス語フランス文学会春季大会)，東京（成城大学），1998.
- 2) 三浦信孝；フランス文学をクレオール化する？ フランコフォン文学の問うもの（フランス語の祭典），東京，朝日出版社，1998，p.292.
- 3) 中島昭子；シンポジウム《琉球とフランス》(1997年度日本フランス語フランス文学会秋季大会)，沖縄県中頭郡西原町（琉球大学），1997.
- 4) NOUVELLE-CALÉDONIE, *petit Larousse en couleurs*, Paris, Larousse, 1988, p.1445.
- 5) メアリー，M. ロジャース，草野 淳訳；目で見える世界の国々⑦ マダガスカル，東京，国土社，1997，p.p.19—37.

- 6) J.-L. JAUBERT, J. LECARME, E. TABONE, B. VERCIER; *LES LITTÉRATURES FRANCOPHONES DEPUIS 1945*, Paris, Bordas, 1986, p. 83.

Midona ny any Ankaratra	La pluie tonne en Ankaratra
Vaky tsipelana ny any Anjafy	L'orchidée fleurit à Anjafy
Mitomany Zanaboromanga	Il est dur d'oublier tout d'un coup,
Mitokaka Ratsimatahotody	Il est aisé d'oublier peu à peu.
Raha todim-paty koa aza manody	Elle pleure, La-fille-de-l'oiseau-bleu
Fa raha todim-pitia manodiava	Il rit, Celui-qui-ne-craint-pas-le-retour.
	Retour de mort, ne retournez pas
	Mais retour d'amour, retournez.

Hainteny d'autrefois, éd. Librairie Mixte,
Tananarive.

Jean Paulhan, *Les Hain-tenys*, éd.
Gallimard.

— Un seul coup de tonnerre dans l'Ankaratra, et les orchidée d'Anjafy fleurissent, et pleure et pleure la Fille-de-l'Oiseau-bleu, et ricane et ricane Celui-qui-ne-craint-pas-le-Châtiment-du-mal!

— Châtiment de meurtre? qu'il y soit sursis! Châtiment d'amour? qu'il soit appliqué!

— Si c'est un voile de tête qui ne sache faire ressortir la beauté, si c'est une façon de se draper qu'on ne puisse porter publiquement, allez donc rentrer chez vous: la nuit tombera avant l'heure!

Jean-Joseph Rabearivelo, *Vieilles Chansons des pays d'Imerina*, Revue de Madagascar.

- 7) MAURICE, *petit Larousse en couleurs*, p. 1399.

- 8) RÉUNION, *ibid.*, p. 1514.

猶, 本論の底本として Jean-Louis JOUBERT; *Littérature Francophone ANTHOLOGIE*, Paris, NATHAN, 1993. を使用した。